

# イギリス推理小説の比較研究

## —コナン・ドイルからアガサ・クリスティへ—

宗里 祐佳

(内藤ゼミ)

### 目次

1. 序章
  2. コナン・ドイルとアガサ・クリスティ年表
  3. 代表作中の人物紹介
  4. 比較：時代背景から読み取る
  5. 比較：文章構成から読み取る
  6. 考察
  7. 終章
- 脚注  
参考文献・参考 URL

### 1. 序章

現在、日本でも江戸川乱歩、赤川次郎を初めてする推理小説や『名探偵コナン』、『金田一少年の事件簿』などの推理漫画、アニメが数多く存在している。これらは老若男女を問わずの人気がある。もちろん私もそのファンの一人だ。

推理小説の起源を遡ると、一般的には世界で最初の推理小説は、アメリカのエドガー・アラン・ポーの短編小説『モグル街の殺人』(1841年)であると言われている。その数年前に書かれた作品の中からも推理小説のような話が収録されており、どこに端を発するのかという議論は未だ続いている。1830年代にイギリスの警察制度が整い、犯罪に対する新しい意識が生まれたという事が推理小説を誕生させた要因の一つであると言えるだろう。推理というものは人間が誕生した時から存在するものであり、人々の好奇心を掻き立てるもののひとつである。

今回、私がこの卒業研究において着目したのはイギリスの推理小説である。イギリス文学はシェイクスピアを始め、今までにも数多くの世界的ヒット作を生み出している。J・K・ローリング作『ハリー・ポッター』も記憶に新しいイギリス文学で

ある。その中でも一番と言っても過言でないほど有名であり、推理小説を語るうえで忘れてはならないのがコナン・ドイル作シャーロック・ホームズ・シリーズである。ホームズ・シリーズは今も世界中の人々に愛され、シャーロキアンと呼ばれる人々がいるほど絶大な人気を博している推理小説である。そしてもう一人、女性イギリス推理作家として忘れてはならないのが名探偵ポアロ・シリーズの生みの親であるアガサ・クリスティである。コナン・ドイルもアガサ・クリスティも誰もが一度は耳にしたことがある名前だろう。そして今回私はこのイギリス推理小説を語るうえで欠かせないこの二人の推理小説を人物、当時の時代背景、文章構成という三つの点から比較をしていき、現在の推理小説への影響を解き明かしていく。霧の都ロンドンを舞台とする二つの推理小説比較である。

第二章ではまずこの論文の中心人物である、コナン・ドイルとアガサ・クリスティの簡単な略歴を彼らの代表作品の年表とともに説明する。第三章では彼らの代表的な作品の登場人物紹介をする。コナン・ドイルの代表作であるシャーロック・ホームズ・シリーズから主人公のシャーロック・ホームズを紹介する。アガサ・クリスティの代表作であるオリエント急行殺人事件やアクロイド殺人事件からエルキュール・ポアロを紹介する。第四章では、彼らの生きた時代を説明する。コナン・ドイルがその生涯の大半を過ごし、シャーロック・ホームズが活躍した時代ヴィクトリア朝と、そのあとに訪れる、戦争へと突入していく20世紀前半～後半、アガサ・クリスティの生きた時代を分析し、比較していく。第五章では、彼らの代表作の文章構成を説明する。コナン・ドイルからシャーロック・ホームズ・シリーズとアガサ・クリスティから「フェア・アンフェア論争」の引き金となった『アクロイド殺人事件』を始めとするエルキュール・ポアロ・シリーズを読み、その文章構成を比

較する。第六章では、彼らの類似点からの考えられる推理小説への影響の考察を記述し、最終章では本研究の結果をまとめ締めくくりとする。また最終結論として現代の推理小説への影響を解き明かす。

## 2. コナン・ドイルとアガサ・クリスティ年表

表1 コナン・ドイル年表

|                                           |                                               |
|-------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| 1859 年                                    | スコットランド・エディンバラで生まれる                           |
| 1876 年                                    | エディンバラ大学医学部進学 (1881 年学位取得)                    |
| 1887 年                                    | 『緋色の研究』(シリーズスタート)                             |
| 1890 年                                    | 『四つの署名』                                       |
| 1892 年                                    | 『シャーロック・ホームズの冒険』(1891 年～計 12 作品掲載)            |
| 1894 年                                    | 『シャーロック・ホームズの思い出』(1892 年～計 11 作品掲載 ホームズ死去)    |
| 約 8 年シリーズ執筆を断念<br>(ナポレオンの時代をメインとした歴史小説家へ) |                                               |
| 1902 年                                    | 『バスカヴィル家の犬』(シリーズ再開)                           |
| 1905 年                                    | 『シャーロック・ホームズの帰還』(1903 年～計 13 作品掲載 ホームズ奇跡の復活)  |
| 1915 年                                    | 『恐怖の谷』                                        |
| 1917 年                                    | 『シャーロック・ホームズ最後の挨拶』(1908 年～計 8 作品掲載 ホームズ最後の事件) |
| 1927 年                                    | 『シャーロック・ホームズの事件簿』(1925 年～計 12 作品掲載 シリーズ終了)    |
| 1930 年                                    | コナン・ドイル死去 (享年 71 歳)                           |

アーサー・コナン・ドイル (1859～1930) は主にヴィクトリア朝時代に活躍したイギリスの作家である。大学で医学部を卒業し、医師として診療所を開業。彼はシャーロック・ホームズで知られる推理小説だけでなく、歴史小説、SF 小説等を多数著した。現在の推理小説の礎を築いた人物であるとも言われる。スコットランドのエディンバラで生まれた彼は 1876 年エディンバラ大学医学部に

進学し、1881 年に卒業 (表 1 参照)。その後で診療所を開業するがうまくいかず、副業として小説を書きはじめる。1884 年、シャーロック・ホームズ第一作目『緋色の研究』を発表。1891 年にシリーズの短編作品を雑誌に掲載し、爆発的な人気を得る。1894 年の『最後の事件』にて、コナン・ドイルはシャーロック・ホームズとそのライバルであるモリアーティ教授を死亡させる。しかし、これを読んだ読者からホームズを死なせたことによるコナン・ドイルへの非難や中傷が相次いで殺到する。これに関してコナン・ドイルは「自分が現実で殺人を犯した場合でも、これほど多数の悪意に満ちた手紙を受けることはなかったはずだ」(ライリー, マカリスト, 2000: 195) と記した。

その後ナポレオン戦争時代を舞台とする歴史小説の連載を再開させる。しかし、歴史小説家として成功することはなく、幾度となく拒否し続けていたシリーズの執筆をシリーズ終了時から約 8 年後 1901 年発表の『バスカヴィル家の犬』にて再開させる。『バスカヴィル家の犬』は、実はホームズが死亡する前に起きていた事件を収録した作品であり、9 年 10 ヶ月後 1903 年発表の『空家の冒険』でホームズは奇跡の復活を果たすこととなる。コナン・ドイルはシリーズを終了させた理由を 1896 年雑誌に掲載されたスピーチにて「これは只の人殺しではなく、自己防衛のための正当な殺人だったのであります。と申しますのは、もし私が彼を殺さなかったら、彼のほうが私を殺したであろうことは、疑いのないところなのです。」(ドイル, 2014c: 738) と述べた。実際コナン・ドイル自身、歴史小説家として活躍したかったという思いがあったのだが、予想以上にシャーロック・ホームズ・その後もシリーズが人気を得てしまったがゆえに、ほかの作品が埋もれてしまったことで、これ以上描き続けるのは自分の意志に反していると考えた故の結論であった。その後もシリーズを書き続けるも 1917 年発表の『最後の挨拶』にて執筆をやめ、シリーズ自体も完結させる。その後 1927 年に『ショスコム荘』の執筆を最後にコナン・ドイルはシリーズの執筆を終了させる。コナン・ドイルは読者に対し「これでホームズとはお別れである」<sup>(1)</sup> と書き記している。

表2 アガサ・クリスティー年表（作品に関しては代表作を記載）

|        |                            |
|--------|----------------------------|
| 1890 年 | デヴォン州トーキーにて生まれる            |
| 1914 年 | 最初の結婚（1928 年離婚）            |
| 1920 年 | 『スタイルズ荘の怪事件』               |
| 1922 年 | 『秘密機関』                     |
| 1926 年 | 『アクロイド殺し』                  |
| 1926 年 | アガサ・クリスティー失踪<br>（のちに発見される） |
| 1927 年 | 『ピック 4』                    |
| 1930 年 | 2 回目の結婚                    |
| 1930 年 | 『牧師館の殺人』                   |
| 1934 年 | 『オリエント急行殺人事件』              |
| 1936 年 | 『A B C 殺人事件』               |
| 1939 年 | 『そして誰もいなくなった』              |
| 1950 年 | 『予告殺人』                     |
| 1975 年 | 『カーテン』<br>（エルキュール・ポアロ死去）   |
| 1976 年 | アガサ・クリスティー死去（享年 86 歳）      |

アガサ・メアリ・クラリッサ・クリスティー（1890～197）は主に 20 世紀に活躍した女性推理作家である。発表された作品は世界中で翻訳され、ベストセラーとなり、ミステリーの女王と呼ばれる。

アガサ・クリスティーは幼い頃より、姉に勧められシャーロック・ホームズなどの探偵小説を読み始めている。わずか 11 歳のころには詩や短編小説を書き始めるようになっていた。1920 年に処女作である『スタイルズ荘の怪事件』を発表するが、この小説が世に発表されるまでに、アガサ・クリスティーは 6 社に原稿を断られ、7 社目にしてようやく出版することが出来たという苦勞が伴った作品である（表 2 参照）。1926 年の『アクロイド殺し』では大胆なトリックと想像を超える真犯人について、ミステリーファンの間でフェアであるのか、それともアンフェアであるのかを巡り論争が起こる。これによって彼女の名は一躍有名となる。また同年、アガサ・クリスティーは謎の失踪事件を起こす。のちに別の名前で宿泊していたホテルで彼女は無事に発見され保護されることとなるが、何故失踪したのかという理由について現在の見解の中では、失踪事件を起こした当時アガサ・クリス

ティーの母が死去。最愛の母を亡くしたことによる深い悲しみ、そして夫ともこの頃から 1928 年に離婚するまでうまくいっておらず精神的に不安定になっていた。その結果アガサ・クリスティーは記憶喪失症を患うことになる。それが大きな原因であるとされているが、本人の口から一切の説明は無く、真相は闇に葬られたままである。保護された後、2 度目の結婚などを経て、アガサ・クリスティーは長編小説 66 作品、中短編小説 156 作品、戯曲 15 作品のほかにも数多くの作品を世に送り出し、1976 年に風邪をこじらせ 86 歳でその生涯の幕を下ろすことになる。

アガサ・クリスティーの作品にはエルキュール・ポアロ、トミーとタペンス（夫婦探偵）、ミス・マーブルの 4 人の探偵が登場する。その中で最も人気があり、アガサ・クリスティー自身も多くの作品を書いたのが、エルキュール・ポアロである。ポアロ・シリーズの代表作として『アクロイド殺し』や『オリエント急行殺人事件』があげられる。しかし、アガサ・クリスティーは自身の自伝の中でポアロについて「初めの 3,4 作品の後で彼を見捨て、もっと若い誰かで再出発すべきであった」（クリスティー、1979a:493）と述べている。彼女自身エルキュール・ポアロを書くことを拒んでいたが出版社や読者の熱い要望により書き続けていた。探偵とその相棒という探偵小説の形式、探偵と相棒が出会い探偵が名声を高めていくという物語の始まり方、自身の作品の中で引用していることからみてもアガサ・クリスティーがその人生を通してシャーロック・ホームズに関心を持ち、尊敬を示していることがわかる。

この略歴から一つだけ類似する点が見つかる。それは、一度この世界から存在を消そうとしたという点である。コナン・ドイルは自身の化身とも言えるシャーロック・ホームズを宿敵との戦いにて殺し、アガサ・クリスティーは自身を謎の失踪という形で存在を消そうとし、また消してはいないもののエルキュール・ポアロについて書くのをやめたがっていたという点である。どちらとも後に復活や保護という形で復帰しているが、イギリス推理文学を語る上で欠かせないこの二人が同じような行動を取るということに、何かしらの意味が隠されていると私は考える。その考察は後に記載す

る。彼らはその生涯で何百もの作品を執筆し、世に出し、読者を喜ばせてきた。しかし、その背景では数々の困難があり、それを乗り越え、その地位を確立した。

### 3. 代表作中の人物紹介

彼らを語る上で忘れてはならないのが、読者の心に残る印象深い登場人物達である。作品がどれほど優れたものであっても、登場人物の印象が薄ければここまで有名にはならなかっただろう。ゆえに、コナン・ドイルは自身よりも主人公であるシャーロック・ホームズのほうが有名となってしまった。コナン・ドイルと聞いてパツとしなくとも、シャーロック・ホームズと聞けば大半の人は理解するだろう。アガサ・クリスティの場合は、“世界で書籍数の累計は10億部数以上と推定され、聖書とシェイクスピアに次ぐ数字”<sup>(2)</sup>とも言われている。結果、ミステリーの女王として世界中にその名を知られるようになった。

第三章では、コナン・ドイルの代表作であるシャーロック・ホームズ・シリーズよりシャーロック・ホームズを、アガサ・クリスティからはエルキュール・ポアロ・シリーズ、トミーとタペンス（夫婦探偵）シリーズ、ミス・マーブル・シリーズの中からエルキュール・ポアロのプロフィールを作成し、比較していく。

表3 シャーロック・ホームズ・プロフィール

|      |                         |
|------|-------------------------|
| 名前   | シャーロック・ホームズ             |
| 性別   | 男性                      |
| 年齢   | 不詳                      |
| 趣味   | ヴァイオリン<br>悪癖として…薬物依存・煙草 |
| 特技   | ボクシング・化学実験・変装・拳銃        |
| 性格   | 冷静沈着・行動力がある             |
| 推理法  | アブダクション                 |
| ライバル | ジェームズ・モリアーティ            |
| 助手   | ジョン・H・ワトスン              |

シャーロック・ホームズの年齢、生年月日、家族構成などについて作品の中で明確に説明されたことはない（表3参照）。ホームズは多才で趣味や

特技が多く、また、その当時に起こった凶悪事件のほとんどの詳細を調べ上げるほど、犯罪に関して興味を持っている。その犯罪に関する知識量は、そこら辺の凶悪な犯罪者よりも豊富であり、ホームズ自身、自分が犯罪者になれば大変なことになっていたであろうという発言をしている。

性格は冷静沈着、行動力に長けている。事件現場に行けば事件の手掛かりを見落とさぬよう地を這い、捜査犬のような捜査するほどである。しかし、探偵業に関係の無いことなどについては全くの無関心であるため、自分の関心を引くような事件がないと一種の燃え尽き症候群のようにうつ状態に陥こともある。その状態を避けたいがゆえに依存度は高くはないものの薬物や煙草に手を染めている。薬物に関しては助手であるワトスンからも注意を受け、何とかやめることに成功はしたものの、煙草は辞めることが出来なかった。ホームズは女性嫌いという一面もあり、冷たく見えがちであるが実際内面はとても温かく優しく、事件の内容によっては思いやりのある解決をすることもある。

徹底した現場観察によって得られた事件解決への手掛かりを、自分の中にある過去の犯罪事例に関する膨大な知識、そして交流の幅の広さを生かし、犯罪界の事情通たちから得た情報などと照らし合わせる。そして、それらを細かく分析、推測し、事件を解決していく。この捜査方法は一般的にアブダクション<sup>(3)</sup>と言われている。また、ホームズは消去法を使うこともあり、『ブルースパーティントン設計図』の中では「ほかの可能性がすべて消えれば、たとえありえそうにないことであろうと、残ったものが真実である。」（ドイル，1984a：299）と述べている。ペイカーストリート・イレギュラーズと言われる少年たちに小遣いを与え、情報収集を依頼し事件の真相を解明していく。このようにホームズは自分の持っている知識を無駄なく、惜しみなく発揮し、事件を解決へと導くのである。

シリーズで忘れてはならないのが、助手であり物語の語り手を務めるワトスンと、ライバルであり「犯罪界のナポレオン」と称するロンドンの犯罪者であるモリアーティ教授である。ワトスンはシリーズの第一作『緋色の研究』で登場する。当初、ワトスンはホームズのことを変人でありその推理

力も疑っていたが、ホームズと共に事件に関わることでホームズの探偵としての能力を認め、ベーカー街 221B にて共同生活を始め、事件が起こると行動を共にし、その事件の記録を書き残している。シリーズの大半はワトスンが語り手となっているため、彼がホームズに依存し物語を書き続けているように思いがちだが、実際のところホームズ自身がワトスンを褒め称えている場面もあり、ホームズ自身がワトスンに依存していると考えられるべきである。ワトスンいてこそその名探偵シャーロック・ホームズでありこのシリーズを作り上げていると言っても過言ではないだろう。

一方モリアーティ教授はシリーズには3回しか登場していない。しかしながら、ホームズの最大のライバルとして読者に対し強烈な印象を与えた。“正体を現さず、自らは手を汚さない犯罪者”いわゆる影の支配者というキャラクターは当時にしてみれば新しく、その後のフィクション作品に与えた影響も大きい。『最後の事件』で、ホームズと対決しライヘンバッハの滝の滝壺に落ちたことで二人とも命を落としシリーズは完結するのだが、コナン・ドイルは、読者のホームズ復活に対する熱い声に応えホームズを復活させ、モリアーティ教授の敗北として決着をつけることを決断する。コナン・ドイルは実際ライヘンバッハの滝を訪れた際、ホームズをその場所で葬ることを決めていた。その時のことを彼は「この場所をみるにおよんで、私には、ある着想が浮かんだ。なんとも恐ろしい場所だ。こここそ、あのシャーロック・ホームズの墓場にするのに最適な場所だと思った。彼を墓場に送るためには、私の銀行預金を一緒に葬っても構わぬと思った。」（小林，東山，2001：280－281）と記している。読者には強烈な印象を与えたモリアーティ教授であるが、実はコナン・ドイルが、ホームズを葬りたいがために作り出した人物であったといわれている。

表4 エルキュール・ポアロ・プロフィール

|       |            |
|-------|------------|
| 名前    | エルキュール・ポアロ |
| 性別    | 男性         |
| 年齢    | 不詳         |
| 趣味・特技 | 不明         |

|      |               |
|------|---------------|
| 特技   | 不明            |
| 性格   | 几帳面・潔癖症・高慢    |
| 推理法  | プロファイリング      |
| ライバル | 特にいない         |
| 助手   | アーサー・ヘイスティングス |

ポアロは元々母国ベルギーのブリュッセル警察の捜査員とし活躍していた。署長まで出世するがその後警察を退職してしまう。その後第一次大戦が勃発し、ドイツ軍の侵略と大戦の戦火から逃れるために海を渡りイギリスへ亡命する。共に亡命した7名と共に、サセックス州の小さな村にあるスタイルズ荘のイギリスの富豪夫人の援助を受けながら、女主人の家であるスタイルズ荘のそばにあるリーストウェイズ・コテージでの生活を始める。そしてそこでベルギー時代に知り合った親友のアーサー・ヘイスティングズ大尉（出会った当時は中尉）と再会を果たす。その直後が援助を受けていた女主人の家であるスタイルズ荘で起った変死事件の捜査を依頼される。親友のヘイスティング大尉を相棒とし捜査を始める。彼は自身の持つ頭脳をフルに活動させ、事件を解決へと導く。（1916年7月17日『スタイルズ荘の怪事件』）。これが彼にとっての初めての事件となり、エルキュール・ポアロ・シリーズの開始である。その後アーサー・ヘイスティングズ大尉と共にイギリスで探偵として活躍する。

ポアロは容疑者たちとの尋問や何気ない会話に焦点を当て、彼らとの会話から人物の思考傾向・行動傾向を探り、地面に這いつくばるようにして現場に残されている証拠品を集め、それらと共に心理分析を組み合わせることで真犯人を言い当て、難事件を次々解決する。ある種プロファイリング<sup>(4)</sup>による方法を用いている（表4参照）。プロファイリング自体の歴史は明確とされていないが、19世紀末にイギリスで連続発生した「切り裂きジャック事件」の際その事件の性格を予想した警察医がいた。その時の予想がのちにFBIが行ったものと一致していたが、犯人逮捕には繋がらなかったため捜査には生かされていたかどうかは定かではない。その後、第二次世界大戦終了時、ナチ戦犯容疑者を捜査するチームが行った「チェックリスト

作成方式」がプロファイリングの基礎となる。大戦後アメリカで増えた常識外れの猟奇殺人によりプロファイリングが急速に発展する。その為プロファイリングは20世紀に始まった比較的新しい捜査方法とされ、ポアロの活躍した時代ではあまり重要視されていなかった。ポアロはプロファイリングに似た方法を取りながら捜査を進めていき、彼の捜査として決定的な証拠が見つかるまでは誰にも決して真相を明らかにほしないという特徴もあった。その為事件の真相に近づくという「私の灰色の小さな脳細胞が活動を始めた」という口癖によって読者や、相棒は事件の真相に近いことを予期していた。

ポアロ・シリーズでもシャーロック・ホームズ・シリーズ同様にポアロの相棒であるアーサー・ヘイスティングズが語り手となっている。また時には彼の何気ない一言がヒントとなり、事件を解決することが物語の定番となっている。女嫌いで冷たく見られがちなホームズと女性に優しいポアロは正反対の印象を受けるが、事件のこととなるとどんな事件状況であろうと、現場状況や警察の動きに動揺せず、冷静に観察を行い自分の目で調べ事件を真相へと導くという姿勢は同じである。

二人の作家が活躍した19世紀末のイギリスはヴィクトリア女王が統治していたヴィクトリア朝時代である。そのため急速な産業革命により発展し、人々の生活は豊かになっていった。またその当時、世界でも最も早い民主主義革命を行ったことで社会的に安定があった。また丸腰の警官制も有名であり市民の共感と親しみを得ていた。安定した人々には時間・経済・精神的にもゆとりがあり、犯人と探偵、読者と作家の知恵比べという構成は人々にとって良い暇つぶしの娯楽でもあった。また、交通網が発達したことで、地方からの通勤者も増えその通勤時間に読む本としても人々に好まれていった。このようなイギリスの社会背景の中で生まれたホームズやポアロは次第に人々の心をつかんでいったのである。

#### 4. 比較：時代背景から読み取る

推理小説は推理作家、世界で翻訳され発売された数などあらゆる部門から見ても、圧倒的な存在

を放ち、読者の人気もある文学ジャンルであると言える。その中でもイギリスというのは推理文学の本家でもあり、推理小説と聞いて真っ先に思い浮かべる国でもある。『21世紀イギリス文学を知る辞典』によれば、推理小説の代名詞ともいえる犯罪を対象として物語を書く際、問題となるのはその国における犯罪の精神風土であると指摘しています（出口、小林、斉藤、2009：632）。日本では禁止されているが、強引な拘束や拷問、自白が日常化している社会環境では名探偵など必要ではない。犯人は名探偵が登場する前に警察によって自白してしまうためである。また猟奇殺人が頻繁に起き、血を見ることが日常となっている社会では殺人や犯罪をゲーム感覚で楽しむことはできない。しかし、先ほどの章の最後で説明したようにコナン・ドイルやアガサ・クリスティが活躍した19世紀末のイギリスにはゆとりがあった。その結果として、推理小説が民衆の心をつかんでいったのである。

第四章ではコナン・ドイルとアガサ・クリスティが生きてきたイギリスの時代を解説していく。コナン・ドイルがその生涯の大半を過ごし、シャーロック・ホームズが活躍した時代ヴィクトリア朝とそのあとに訪れる戦争へと突入していく20世紀後半、アガサ・クリスティの生きた時代を分析し、比較していく。

表5 時代説明

|       | アガサ・クリスティ          | コナン・ドイル                |
|-------|--------------------|------------------------|
| 時代    | 20世紀<br>～20世紀後半    | 19世紀後半<br>ヴィクトリア朝時代    |
| 変化・特徴 | 戦争へ突入<br>世界全体が荒れる  | 産業革命の絶頂期<br>植民地化政策     |
| 大きな事件 | 第一次世界大戦<br>第二次世界大戦 | 切り裂きジャック<br>11月3日血の日曜日 |

コナン・ドイルが生きた1859年～1930年、そしてシャーロック・ホームズが活動していた1887年～1927年は19世紀末ヴィクトリア朝時代と一般的に言われている(表5参照)。ヴィクトリア朝はヴィクトリア女王がイギリスを統治していた期間であり、産業革命によりイギリスが経済的に発達し、機械生産により大量に生み出される商品の原材料の調達を楽にしていくために植民地化政策がとら

れた時代でもある。この間に時代は大きく移り変わる事となる。その先駆けとしてガス灯が電灯に、馬車が自動車に、電報が電話へと近代化していく。1859年にダーウィンが『種の起源』<sup>(5)</sup>を発表。これによって民衆の物の考え方、社会思想にまで大きな影響を与える。1890年代には神智学やその他のオカルトが盛んとなる。そして、科学が学問部門におけるまでに成長し、大学でも科学の知的専門職が増える。そして多くの男性が博物学に身をささげるようになる。同時に科学者も増え、科学捜査も行われるようになる。また、ロンドンはイギリスの産業の中心地として急速に発展し、そのため人口が爆発的に増え、富裕層、貧民層も明確となる。また石炭などの燃焼によって煙などのスモッグが発生し、「霧の都ロンドン」と言われるようになったのもこの時代からである。人口増加と共に犯罪が多発するようになり、人々の中で不安が高まったこともあり、スコットランドヤードが創設される。しかし、その裏側で一般市民が犠牲となる事件も立て続けに起こっている。1887年11月3日、社会主義と失業者数万人の人がトラファルガー広場に集まり、数百人の負傷者と2人の死亡者を出した血の日曜日事件。1888年8月31日から11月9日の約2か月間にロンドン、イーストエンド・ホワイトチャペルで少なくとも売春婦5人が刃物によってバラバラに切り刻まれるという連続猟奇事件。殺人鬼の逮捕も、犯人を特定することもできず当時の警視総監サー・チャールズ・ウォーレンを辞任へと追いやることとなった有名な「切り裂きジャック事件」が発生する。そんな中での探偵というのは彼らにとって救世主ともいえる存在であったともいえる。時代変化が著しい中でシャーロック・ホームズ・シリーズは時代と共に近代化していかず19世紀末の世界で活躍しつづける。しかし、科学者が増え科学が社会的にも認められたことを受け、シャーロック・ホームズも作品の中で「推理の科学」を口にしていく。コナン・ドイルも時代と共に常に新しいものを取り入れ、人々が物語に感情移入しやすい方法を取り、シャーロック・ホームズも読者も時代に取り残されないような工夫を取り、現代社会への理解を深めようとしていたと考えられる。

のどかな田園生活の時代から、急速な社会発展、

都会への生活に変化したこの時代は、イギリスだけでも犯罪史上に残る多くの殺人事件が記録されている。イギリスにおいての栄光の時代は犯罪史上だけでなく、現代においても似たような事件が多く残った時代でもあった。『シャーロック・ホームズ大事典』の中でホームズ物語を貫く主題のひとつは「ヴィクトリア朝精神に対する攻撃だった」と指摘している（小林、東山、2001：74）。人々はゆとりのために推理小説を読むだけでなく、裕福になると共に広がる貧富の差、謎めいた恐怖事件を解決してほしいという願望から探偵という存在が現実世界に現れることを望んでいたとも考えられる。

次にアガサ・クリスティーが生きた1890年～1976年はヴィクトリア朝から時が流れ、戦争の時代へと突入していく20世紀である。この時代はイギリスだけではなく、世界全体が大きく変化する。そして20世紀前半に起こった2つの世界大戦で、ヨーロッパの国々の経済状況は悪化していく。日本でも徳川政権が大政奉還を行い、1894年の日清戦争を皮切りに1902年に日英同盟、1904年日露戦争と戦争の時代へと突入。この時代は当時植民地化政策を取ったことで国外との植民地争いも勃発。1898年ファショダ事件。1899年イギリスとオランダ系のボーア人が南アフリカの植民地化を争った二回にわたるボーア戦争が連続して起こる。また急速な産業革命、労働者が増えたことによる問題も発生。1909年に労働組合が政治目的のために組合資金を使用とすることの違法性を認めたイギリスの裁判所が下したオズボーン判決。1926年企業や組織によるストライキではなく、全国的な規模で行われたゼネラル・ストライキも発生。映画でも有名となった1912年のタイタニック号の遭難もこの時代に起こった大きな事件である。1914年の第一次世界大戦。1939年の第二次世界大戦と世界規模の戦争が勃発し、アガサ・クリスティーはその二つの大戦を経験し時代の荒波の中を生き、推理小説を書き続ける。結果として、かつてのイギリス領は戦後次々と独立していき、イギリスは過去に栄光を放っていた国として没落してしまう。1960年以降になると、英国病と呼ばれる経済不況へと時代は変化する。福祉を充実させるために重い税が課せられ、社会保障費が高くなり、いくら働いて

も支出が多いという面から国民の勤労の意識が低下していく。結果としてイギリスの経済は低迷していったのであった。栄光の時代から次第に没落への道を進んでいくこととなったイギリスの中で生きてきたアガサ・クリスティの作品には、栄光の時代の名残を残したというような表現をする場面が存在する。そのためアガサ・クリスティはコナン・ドイルとは違い時代には忠実に物語を書いていたと考える。しかしながら、どこかかつてのイギリスの面影が残るそんな情景も思い描くことが出来る。

時代背景を比較することで私たちがホームズやポアロに対して抱いているイメージ背景が明確となる。そして、イギリス推理文学が発展していった過程を見て取ることが出来るのである。ゆとりの中で暇つぶしの一環とし、娯楽を楽しむために読まれた時代から、社会的にも精神的にも不安の中で唯一の娯楽として読む時代へと変化していった。どちらの時代とも社会情勢が不安定な時代であり、人々は常に不安と共に時代を過ごしてきた。そんな人々は推理小説の中の探偵、ホームズやポアロのある種、宗教のように崇拜しそれを心のよりどころにしていたようにも感じ取れる。

## 5. 比較：文章構成から読み取る

物語というのは大胆なトリック、その当時の人々の心境を掴むだけで成り立つものではない。物語には“起承転結”が存在し、それを無視して物語を進めてしまうと途端に話の内容が頭の中に入り込まなくなる。また、情景が著しく変化する場合も脳がその動きについていけず、一瞬にして読む気を無くしてしまうものである。一つ一つ順序を踏み、先の見えない物語展開が人々の心をつかみ、釘付けにしていくのである。

第五章ではコナン・ドイルとアガサ・クリスティの作品の文章構成を比較していく。エドガー・アラン・ポーの書き方を踏襲したコナン・ドイルと彼の書いた作品を読み、幼少期を送ってきたアガサ・クリスティ。二人の物語の書き方の違いと類似点を比較していく。

彼らの作品の構成を比較する前に一つ確認をしておこう。そもそも推理小説とは一体何を定義と

しているのかである。まず、推理小説と聞いて思い浮かぶイメージは「探偵」「謎」「推理」などだろう。日本を代表する作家江戸川乱歩は『幻影城』の中で推理小説の定義を「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれていく経路の面白さを主眼とする文学である。」<sup>(6)</sup>と述べています。ここで、探偵小説と述べられているのは、当時まだ推理小説という言葉が使われていなかったからである。乱歩は探偵小説、すなわち推理小説を面白くする要因として、始まりの不可思議性、中間におけるサスペンス、結末の意外性の三点を挙げている。あくまでこれは面白くするための要因であり、必ずしも必要というわけではないが、面白さに欠けてしまう。そう乱歩は述べている<sup>(7)</sup>。

まずは、推理小説の礎を築いたコナン・ドイルの構成からみていく。彼は長編小説4作品と短編集5冊の中に56作品を掲載し、シリーズ全体で60作品を世に送り出した。その内6作品は三人称、もしくはホームズの一人称で物語が書かれている。長編小説の『緋色の研究』と『恐怖の谷』では、後半部分に過去の出来事が書かれているため三人称で物語が進められていくが、それ以外のシリーズは助手のワトソンの一人称で書かれている。ワトソンの一人称というのは、ワトソンがホームズの解いた事件を記録する「事件記録」という形をとっているためである。ワトソンがホームズの解いた事件を書き綴るようになった過程には、『緋色の研究』事件の際、ホームズが自身の頭脳をフル活用し、解決へと導いたにも関わらず、スコットランドヤードのレストレード警部にその手柄を横取りされたことに腹を立て、世間にホームズの素晴らしさを知ってもらいたいという思いから事件を記録したのがはじまりである。

今回はそのシリーズの中でも読者による順位付けで第一位を取った『まだらの紐』をもとに先ほどの要因3つとコナン・ドイルの書き方を解説していく。『まだらの紐』は1892年に発表され、読者にも人気のある作品である。物語の始まりは、依頼人であるヘレナ・ストーナーと事件の詳細を秘密にすることを約束していたが、依頼人が亡くなったため発表できるようになったという前置きがあり、依頼人であるヘレナ・ストーナーが朝早くに

ホームズを訪ねたことから始まる。事件は結婚を2週間後に控えた姉が自室で「まだらの紐」という言葉を残し謎の死を迎えてしまう。生前、姉が「真夜中に笛の音が聞こえる」と話しており、屋敷の改築に伴い姉の部屋を使用するようになったその夜より不気味な音が聞こえるようになり、不安に駆られ急いでホームズのもとへ来たのであった。ホームズとワトソンは依頼人と共に屋敷へ赴き、依頼人の母親が亡くなった時に残した遺産と、現在一緒に住んでいる義父のロイロット博士、そして部屋を細かく調査する。そして、依頼人の部屋とロイロット博士の部屋に通じる通気口と鳴らない呼び鈴の紐、博士の部屋にある金庫にはペットもないのに、ミルクと先端の部分が輪の形に細工された謎の鞭があるのを発見する。ホームズはこれらの手掛かりをもとに、ある可能性に辿り着き、夜、依頼人と入れ替わることを提案する。その夜、ホームズは依頼人の部屋で話にあった奇妙な音を聞き、手に持っていたステッキで鳴らない呼び紐を叩き付ける。すると隣の部屋からロイロット博士の断末魔のような叫び声が聞こえ部屋へ行くと、まだらの紐状の毒蛇が巻き付いていて、博士は死んでいた。実行犯は蛇であり、それを計画したのはロイロット博士という結末の物語である。

『まだらの紐』で、始まりの不可思議性、中間におけるサスペンス、結末の意外性の三点を示すと、「姉の謎の死と謎の音」「博士の謎の金庫と命の危険性」「まだらの紐の正体」という事になるだろう。中間のサスペンスに関しては本を読む人の感情に左右されるものもあるが、ホームズが調査する中で見つかっていく用途の分からない道具や物、そして姉が死んだ部屋を使わなければならない依頼人の心理状況などが読者の心をひきつける要因であり、コナン・ドイル独特の情景描写なのである。

上記はあらずじであり細かなに物語を解説しているわけではないが、ホームズ・シリーズの面白さは物語の流れだけではなく物語の情景描写にもある。それは小説を書くにあたって最も重要である。

推理小説と聞いてイメージするのはやはり「殺人事件」である。もちろんシャーロック・ホームズ・シリーズでも殺人事件を数多く扱っている。その中でも「変死体」が多く、その描写もリアルに描

写している。今回説明した『まだらの紐』でも「変死体」を扱っているが、コナン・ドイルは死体ひとつとっても物語の描写をリアルに再現している。そうすることで読み手がより深く物語に入り込むことが出来、ワトソン目線で一緒に事件を解決することが出来るという錯覚に陥る。細かな描写をすることがホームズ・シリーズを面白くする要因であり、コナン・ドイルの書き方の特徴でもある。

次にアガサ・クリスティーの構成方法である。アガサ・クリスティーはエルキュール・ポアロ、ミス・マーブル、トミーとタペンス（夫婦探偵）の3人の探偵で数々の作品を世に発表している。彼女もまた、幼い頃よりホームズを愛読してきたため、探偵と相棒という物語の構成をとっている。今回はエルキュール・ポアロ・シリーズよりフェア・アンフェア論争が起こった『アクロイド殺し』からクリスティーの特徴を説明していく。

『アクロイド殺し』は1926年に発表され、推理小説界に大きな反響を呼んだ作品である。イギリスの田舎の小さな村の医師であるシェパードの手記の形で物語は進められていく。事件は村の資産家であるロジャー・アクロイドが自宅で刺殺され、ロジャーの養子であるラルフに殺人の容疑がかけられてしまう。ラルフは前日に帰ってきていたが荷物だけ置かれており行方も分かっていなかった。しかし、婚約者がラルフの無実を信じ、村に引越してきていたポアロに調査を依頼する。ポアロは話を聞きシェパードを相棒にし、事件を推理していく。村の人々や家族からロジャーがどのような人物であるのか、死んだ時の状況や、村の最近の出来事など聞き込み調査をしていくうちに、ロジャーの死には村の人々が恐れている最近起こった恐喝事件と関係があると推理し、犯人もラルフではなく別にいることを突き止める。ポアロは、恐喝事件の犯人がロジャーに自分の犯した犯罪について知られそうになり、殺害したと皆の前で説明し、犯人は医者という立場を利用し、人々の秘密を恐喝の材料にしていたシェパードであり、それが事件の全貌であると推理した。

『アクロイド殺し』での始まりの不可思議性、中間におけるサスペンス、結末の意外性の三点を示すと「ロジャー・アクロイドの謎の死」「村人が恐れる恐喝事件」「語り手が犯人」と言えるだろう。

この『アクロイド殺し』の最大の面白さは、物語の語り手であり、ホームズ・シリーズで言うワトスン役が犯人であるという独創的なアイデアと、叙述トリック<sup>(8)</sup>を使っている点である。アガサ・クリスティの書き方の特徴として挙げられるのが、独創的なアイデア、叙述トリックと人々の心をつかみ読み取る心理描写である。彼女の物語は事件の概要、もしくはこれから登場してくる人々の紹介から物語は始まっていく。その為、読者は登場人物がどんな人で、どのような経緯で事件に絡んでいるのかが分かるようになっている。そして、事件の背景とその場にいた人々の心理状況や雰囲気などがまるでその場にいるかのような書き方をしている。結果として叙述トリックに読者がはまってしまうという、心の状態に敏感なアガサ・クリスティだからこそ書ける物語、物語構成であり、クリスティ作品を面白くさせる要因であると言える。

今回は分かりやすくするため、殺人事件を扱う推理小説を説明してきたが、推理小説というのは「殺人」だけを扱っていても面白さはない。毎回、人が亡くなる物語というのは正直読者からしても現実味がわからない。しかし、コナン・ドイルとアガサ・クリスティは殺人事件だけではなく、失踪事件なども扱っている。それにより、人々の心は引き寄せられていくのである。

コナン・ドイルとアガサ・クリスティは探偵と相棒という構成は同じであるものの、“起承転結”の書き方や、推理方法、使うトリック方法は様々である。そして流れていく時代と自身の生活環境の中で新しい推理小説の構成やトリック方法を発表していき、その文学の地位確立へと貢献してきた。叙述トリックもアガサ・クリスティが『アクロイド殺し』を発表したことで、推理小説でのトリック方法の一つとして確立された。まだ推理小説の地位が確立されず、様々な反論を呼び、討論されてきた彼らには彼らなりの葛藤があり、悩みがあった。しかし、彼らがいたからこそ推理小説は文学として確立された。彼らなしに今の推理文学を語ることは出来ない。

## 6. 考察

第2章の中で私は彼らの類似点として“一度この世界から存在を消そうとした”という事を指摘した。何故、彼らは一度自分自身や化身ともいえる作中の人物を消し去ろうとしたのか。私はこれまでの研究から一つの結論に至った。それは「世間に対するイメージの払拭と自分自身の再確認」ということである。

コナン・ドイルがシャーロック・ホームズを殺した理由を自己防衛のための殺人であり、自分の意志に反していたためと前に述べたが、それ以外の理由としても「さほど鋭くない人間にとって、謎を考案し機能的推理の連鎖を作っていくことに自分の時間を消費するのは、つらい作業なのです。読者の辛抱に委ねるべきではないのは当然のこととしましても、一人の人物を主人公とする物語を26編も書いてきたのですから、更なる禁断を犯してまでもこの人物を削除すべき時である、と感じるようになったのです」(ドイル, 2014c : 738)と語っている。コナン・ドイルにとってホームズとは自分の作り出したただの物語の主人公に過ぎなかった。しかし、どんどん一人歩きしていくホームズに自分が消されてしまうと感じてしまった。と、私は読み取る。また、コナン・ドイルの2度目の妻ジェーン夫人が「コナン・ドイルはシャーロック・ホームズだった」と題する文章をピアソンズ・マガジンにて発表している。そこにはホームズ同様にドイルにも素晴らしい推理力と分析力があり、警察も困った事件を解決したこともあったが、世間の人はそのことを知らないと言われている。この文章からもコナン・ドイルとシャーロック・ホームズはイコールで結ばれた関係であることがいえる。そのイコール付けがドイルからしてみれば耐え切れないものであり、いつか莫大な大きさとなったシャーロック・ホームズに自分は飲み込まれてしまうと感じてしまったのである。だからこそコナン・ドイルは彼を消し去り新しいスタートを切りたかった。そしてコナン・ドイルは歴史小説家としてナポレオンが生きた時代を主として作品を書き始めるが、世間のイメージを払拭する事も、いつの間にか深い絆で結ばれていたシャーロック・ホームズがコナン・ドイルから離

れる事もできなかった。結果としてお金も無くなり生活にも困ってしまう。家族がいて、医師として開花することもできず、書くことでしか生きていく術がなかった彼はシャーロック・ホームズを復活させ生涯を通じて付き合い続けることを余儀なくされたのである。

また、アガサ・クリスティも自身の「わたしの創作したベルギー人エルキュール・ポアロがちょうどアラビア夜話中の例の海の老人のように、わたしの首のまわりにぶら下がってしっかりとくっついて離れなかった。」(クリスティ, 1979a: 485)と述べている。元々アガサ・クリスティにとっては印税が入ることや演劇化されることは大した意味はなく、重要なことは本が出版されるということであり、出版された当時、生涯を通して作家という仕事をする事になるとは思っていなかったのである。当時、アガサ・クリスティ自身もこれ以上もっと本を書こうとも思っていなかったと述べている。二人とも自分の意志に反して物語を書き続けることに違和感を覚えまた苦痛を感じていたように思う。その結果、アガサ・クリスティは自身を深く理解してくれていた母の死去や、出版当時一緒に喜びを分かち合った夫との関係の悪化などの不幸や不安、そして求め続けられる連載による働きすぎで記憶を失いそのまま姿を消すという事件を起こしている。それが彼女にとって唯一の逃げ道であった。アガサ・クリスティもその後保護され、自身が死ぬ間際までエルキュール・ポアロを書き続け、彼とともに生きることを選んだが、それは読者、出版社、そしてエルキュール・ポアロにしがみつかれたがゆえの結論であったと考える。

二人とも書き始めたときから主人公たちが自分にしがみついて離れず、いつか自分を殺してしまうのではないかと。ある種脅迫、追い詰められていたのであろう。救世主のように人々に崇められるようになるホームズとポアロ。それは自分が作り出したもののなのに、あたかも自分は存在していないそんな感覚に陥り、物語の登場人物が実在して、自分はただの傍観者のように感じ、自分のイメージと世間でのイメージの違い。「イコール」で結ばれる彼らの存在。自分の願いとは違う方向に進んでいくこと。そこから逃げ出したかった。そ

の結果コナン・ドイルはシャーロック・ホームズを殺し、アガサ・クリスティは自分自身を消すという手段を取り、読者に対して体を張った訴えをしたと考えられる。しかし、彼らは生涯をかけてシャーロック・ホームズとエルキュール・ポアロと付き合う事を決めた。そこには彼らを通じて彼らを作り出した自分の事を未来の読者に認めてもらいたいという願いがあり、激しく時代変化していく中でも変わらないもの、犯罪史上に残る特異な事件、新しいタイプの犯罪も起こり、人々の思考も変わらざるをえなかったこの時代で必要とされているもの、それが人の心であり、思いであり、探偵という救世主であった。コナン・ドイルもアガサ・クリスティもそれを理解していた。だからこそ最後まで彼らを生かし書き続けたのは、そんな思いと自分を今は認めてもらえなくとも、後世で認めてもらいたい、自分が生きたあかし、自分の存在を残したかったというそんな思いがあったのだろう。作家にとって物語は自分の分身であり、主人公も分身なのであった。

またシャーロック・ホームズは作中の中で自身の兄に対して、自分より優れた頭脳を持っていると発言する。それに対してワトソンは謙遜であるというがホームズは「僕が兄のことについてなにか発言するときはすべて真実であると捉えてくれ」という場面がある。それはワトソンや読者からとれば探偵は真実しか語らないという探偵という職業の定義を述べていると考えるが、作者のコナン・ドイルからしてみれば、自分よりも優れた物語を書く人もいて、優れた能力を持つ者もある。だから自分はまだまだであるという思いがあったからこそその言葉であると私は考える。そしてアガサ・クリスティもまた「私はシャーロック・ホームズ伝統によって書いていた」(クリスティ, 1979a: 493)と述べているため、自分が優れていたわけではなく、私は優れていた人の書き方を真似ているだけであるという思いがあり、読者に対してもその思いをわかってほしいと考えていたと読み取る。そして彼らがなぜ、変人探偵にこだわったのか。それは人を見かけで判断せず、自分の目で見て自分で聞いたことを大切にすることが重要であるのではないのかと本を通じて問いかけていたと考える。ホームズやポアロが警察の言うことを鵜呑み

にせず、這いずり回るように現場を調査し、聞き込みを行ったこと、助手であり探偵としての知識も少ないワトスンやヘイスティングスの言葉を聞き入れたことは、社会に対して、こうした人々は幸せであるという思い込みはやめ、人々の思いを聞き入れ、もっと広い目でイギリスを見て欲しいという思いがあり、のちにくるであろう最悪の事態を防ぐための社会への警告であったとも考える。

現在ではJ・K・ローリングもハリー・ポッター・シリーズの中で様々な憶測が飛び交い、「J・K・ローリング＝ハリー・ポッター」というイメージがついてしまった。結果、別の名前でも性別も変え男性として新しく推理小説を書くが、結局書き方などからJ・K・ローリングと判明してしまう。彼女もコナン・ドイルやシャーロック・ホームズと同じで一度自分の存在を消さないと、書けない物語があったと考える。推理小説を書けるだけの能力があるのにそれを活かす事のできない憤り、やめる事のできない、追い込まれる人生ではなくのびのびと自分の能力を存分に発揮する人生を送りたかったのかもしれない。現在の推理文学を作り上げた二人だが、その裏側には「世間に対するイメージの払拭と自分自身を認めてほしかった」という思いがあったと私は考察する。

## 7. 終章

ホームズ物語がなかったなら、現代の探偵小説はなかったと、ハワード・ヘイクラフトは『娯楽としての殺人』の中で述べているように<sup>(9)</sup>、書き方、変人探偵と相棒、探偵としての知識量の豊富さ、警察との関係性など、全てを築き、またシャーロック・ホームズのライバルである、モリアーティ教授のような影の支配者というキャラクターを作り上げたのもコナン・ドイルである。J・K・ローリングのハリー・ポッター・シリーズでもヴォルデモートが影の支配者として登場している。日本でも『名探偵コナン』では黒の組織の中の例のあの人、『金田一少年の事件簿』では高遠が登場する。このように影の支配者がいる事によって推理小説、探偵小説は面白さがますのである。これまで人物・時代・構成と三点から推理文学の比較を行い、研

究を進めてきた。1830年代にイギリスの警察制度が整い、犯罪に対する新しい意識が生まれたことで爆発的な人気を生むことになったのが推理文学である。その人気の発祥地であるイギリス。そんなイギリスが「謎に包まれ推理文学の国」としてのイメージがついたのは、イギリスが霧の都と呼ばれていたことも一つの要因である。コナン・ドイルがポーの書き方を踏襲し、それを推理小説として確立させ、その後アガサ・クリスティが叙述トリックなど新たな手法や書き方、「フェア・アンフェア論争」など読者と書き手の謎解き対決という文学として新しい風を吹かせた。自分の意志と戦い、世間と向かい合い生涯をかけて推理小説を書き続けたコナン・ドイルとアガサ・クリスティ。この二人が中心となり生み出され、確立された推理小説は新たな文学としてこれからも人々に愛され続けていくであろう。

## 謝辞

本論文作成にあたり、貴重なご意見を賜りました今西薫先生（元京都学園大学人間文化学部国際ヒューマン・コミュニケーション学科教授）に深く感謝いたします。また、日頃のゼミを通じて多くの知識、そして本論文作成のご指導を頂きました卒業論文指導教員の人間文化学部国際ヒューマン・コミュニケーション学科内藤登世一教授にお礼申し上げます。

## 【脚注】

- (1) 『ストランド・マガジン』1927年3月号に掲載
- (2) 国内外のミステリー・推理小説のデータベースサイト アガサ・クリスティ <http://www.agathasearch.com/10lagathachristie.html> (2014年12月9日閲覧)
- (3) アブダクションとは、アメリカ哲学者パースによって定式化された科学探求の一段階。演繹および帰納に先立って、観察された現象を説明する仮説を発想し、形成する手続きをとる。仮説的推論。(松村、2006: 64)
- (4) プロファイリングとは、過去の犯罪データを基に、犯人の動機や行動パターンを推理、分析し、犯人像を割り出す方法。アメリカで発達。(松村、

前掲書：2262)

- (5) 『種の起源』とは、進化のしくみとして自然選択を唱えたダーウィンの著。1859年刊。(松村, 前掲書：1202)
- (6) 江戸川乱歩著『幻影城』(1975年)
- (7) 夜明けまでミステリ推理小説とは?～定義をめぐって～1 (愛理修作) <http://ncode.syosetu.com/n7973bo/10/> (2015年8月25日閲覧)
- (8) 叙述トリックとは、ミステリー小説において、文章上の仕掛けによって読者のミスリードを誘う手法。具体的には、登場人物の性別や国籍、事件の発生した時間や場所などを示す記述を意図的に伏せることで、読者の先入観を利用し、誤った解釈を与えることで、読後の衝撃をもたらすテクニック。はてなキーワード <http://dhatenane.jp/keyword/叙述トリック> (2015年9月2日閲覧)
- (9) コナン・ドイル著 (常盤新平, 中尾明訳) 『シャーロック・ホームズ全集⑤ シャーロック・ホームズの冒険【上】』(1983年) 偕成社, 399頁

#### 【参考文献・参考URL】

※基本的に脚注に掲載された文献・URLは省いている。

- アガサ・クリスティー著 (乾信一郎訳) 『アガサ・クリスティー自伝【上】』(1979a年) 早川書房
- . (乾信一郎訳) 『アガサ・クリスティー自伝【下】』(1979b年) 早川書房
- アガサ・クリスティー著 (清水俊二訳) 『そして誰もいなくなった』(2003年) 早川書房
- アガサ・クリスティー著 (田村隆一訳) 『スタイルズ荘の怪事件』(1982年) 早川書房
- アガサ・クリスティー著 (羽田詩津子訳) 『アクロイド殺し』(2003年) 早川書房
- アガサ・クリスティー著 (藤沢忠枝訳) 『オリエント急行殺人事件』(1960年) 新潮文庫
- 河村幹夫著 『コナン・ドイルーホームズ・SF・心霊主義』(1991年) 講談社, i - viii頁
- 小池滋監修 『イギリス (読んで旅する世界の歴史と文化)』(1992年) 新潮社 124頁 - 125頁
- コナン・ドイル著 (大村美根子, 常盤新平, 青木日出夫訳) 『シャーロック・ホームズ全集① シャーロック・ホームズ最後の挨拶【上】』(1984a年) 偕成社

- . (大村美根子, 常盤新平, 青木日出夫訳) 『シャーロック・ホームズ全集① シャーロック・ホームズ最後の挨拶【下】』(1984b年) 偕成社
- コナン・ドイル著 (常盤新平, 中尾明訳) 『シャーロック・ホームズ全集⑤ シャーロック・ホームズの冒険【下】』(1983年) 偕成社、
- コナン・ドイル著 (小林司, 東山あかね, 高田寛訳) 『シャーロック・ホームズ全集④・シャーロック・ホームズの思い出』(2014a年) 河出書房新社
- . (小林司, 東山あかね, 高田寛訳) 『シャーロック・ホームズ全集⑤ バスカヴィル家の犬』(2014b年) 河出書房新社、
- . (小林司, 東山あかね, 高田寛訳) 『シャーロック・ホームズ全集⑥ シャーロック・ホームズの帰還』(2014c年) 河出書房新社
- 小林司, 東山あかね編 『シャーロック・ホームズ大事典』(2001年) 東京堂出版
- 出口保夫, 小林章夫, 斉藤貴子編 『21世紀イギリス文学を知る辞典』(2009年) 東京書籍
- 中村邦夫, 大神田文二, 木下卓著 『たのしく読めるイギリス文学—作品ガイド150』(1994年) ミネルヴァ書房, 124頁 - 125頁
- 久守和子, 石井倫代, 窪田恵子著 『たのしく読める英米女性作家—作品ガイド120』(1998年) ミネルヴァ書房, 92頁 - 93頁
- 福田陸太郎編 『イギリス女流作家群像』(1983年) 駸々堂出版, 224頁 - 233頁
- 松村明編 『大辞林 第三版』(2006年) 三省堂, 64頁, 2262頁, 1202頁
- 村岡健次, 川北稔編 『イギリス近代史 改訂版—宗教改革から現代まで—』(2003年) ミネルヴァ書房
- ライリー・ディック, パム・マカリスト編 (日暮雅通監訳) 『ミステリ・ハンドブック シャーロック・ホームズ』原書房, 2000年
- The Sherlock Holmes Museum 221b Baker Street London NW1 6XE (パンフレット)
- コンプリート・シャーロック・ホームズ時代背景 <http://www.221bj.jp/society.html> (2014年10月14日閲覧)
- 著者と作品 <http://www.221bj.jp/author.html>

(2014 年 10 月 14 日閲覧)

シャーロック・ホームズシリーズ作品一覧 [http://  
www.geocities.jp/n\\_quaker/holmes/](http://www.geocities.jp/n_quaker/holmes/)

(2015 年 8 月 27 日閲覧)